

「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～「夜間中学の宿題と・・・郵便配達員」～

私の初任校は定時制高校で、隣には夜間中学が併設されていました。夜間中学は戦前、戦後の貧しい中で、十分な教育を受けられなかった方々のための学校です。そこで読み書き、計算など、小学校レベルから教えてくれる学校で文字通り仕事を終えてからの登校なので、夜に授業が行われます。近年は、外国籍の生徒が増えるなどその役割は多様化しているようです。

元夜間中学教師、松崎 運之助（みちのすけ）さんの話です。

写真は、松崎先生の「生徒の子どもと一緒に参加した親子授業」です。



国語の授業で、松崎先生は「ハガキを書く」という宿題を出した。なんでもいいからハガキの裏に好きなことを書いて投函する。宛先は松崎先生のアパートだ。

数日後、先生のアパートに次々とハガキが届いた。ただ一人、イノさんからのハガキだけが届かない。イノさんは当時 30 代の左官職人だった。

「ちゃんとポストにいれたのに・・・」 イノさんは残念がっていた。

ハガキのことを忘れかけていた頃、1 枚の不思議なハガキが松崎先生のアパートに届いた。何回も書いたり消したりしたらしく、住所のところは黒くなって、ほとんど読めなかった。「まつぎき みちのすけ さま」という文字だけがかろうじて読めた。

「こんなので届くはずがない。なんで届いたんだろう」と松崎さんは思った。よく見ると・・・ハガキの隅に地図が書いてあった。

「やきとりや」と書かれ、そこから矢印がアパートの絵に伸びていた。そして 3 番目の部屋が塗りつぶしてあり、「ここ」と書かれていた。

「せっかく住所を書く練習をしたのに、何で地図なんか書いたの？」と聞くと、「やっぱり目印があったほうが配達しやすいんだよ。」とイノさん。



数年後、松崎さんは、この話を地域の公民館の講演会で話した。講演後一人の男性が近寄ってきた。顔を見ると目が真っ赤になっていた。「先生！今日の話にどれだけ励まされたか分かりません。」とお礼を述べた。

男性は長年、郵便配達をしていた。一軒一軒手紙を運ぶ仕事に誇りと喜びを感じていた。どんなに読みにくい字も、想像力を働かせながら読み取り、必ず宛先まで送り届けた。

台風の日も、年末年始も休まず、手紙を届けた。1日の仕事が終わると、お茶を飲みながら「あそのあばあちゃんが」とか「あその娘さんが」と、地域の話に花が咲いた。

やがて職場に郵便番号を読み取る機械が導入され、配達もアルバイトが行うなど合理化が進んだ。同僚も配置転換された。男性は配達の仕事に喜びを感じなくなっていた。そんな時に、松崎先生の話聞いた。

「昔の懐かしい思いが込み上げてきました。普通ならそんなハガキは『宛先不明』で処理すればいいんです。だけどその配達員はきつとそのハガキを手にしたとき、自分の原点を思い出したんだと思います。」

「これを必ず届けなきゃ」って。私にはその気持ちが分かるんです。」

と、男性は涙をボロボロこぼしながら話した。

イノさんの「届いてほしい」と気持ちで、何度も書いては消した懸命な文字が・・・郵便配達員の「これを必ず届けなきゃ」という自分の仕事の原点を揺さぶり起こしたのかもしれないね。素敵な話ですね。